

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



小治田之真清水

池田 誠一

【7】都市の計画…白紙の台地

1 城下町の構想

名古屋城の城下は、城の南に広がる名古屋台地を生かして造られることになりました。というより、むしろこの台地があったからこそ名古屋の地に遷府したといえるのかもしれませんが。もちろん地形には多少の凹凸がありました。町並もあり居住者もいました。しかし中心部の土地は築城に合わせて削平され、住民は移転を前提に自由に城下町が計画できることになったのです。

ほとんど白紙の状態の所に都市を構想し建設するということは、古代の都城を除くと、あまり例の無いことに思えます。平坦な台地上の制約のない城下町づくり。そこにはどのような構想が描かれたのでしょうか。今回は、名古屋城の城下町が、当初、どう構想され、計画されていたかを見てみたいと思います。

2 名古屋城の城下

(1) 台地の利用

名古屋城下は名古屋台地の北部と隣接する大曽根面の台地部をいっぱい使う形で構想されました。台地は、東西が4㍓弱で南側に狭く逆台形になっており、その東側は隣の台地に続いて、南側は緩やかに下がっています。一方西

側は急な下りで、10㍓ほどの段差があります。

町は、城の東から南、基本的にはその台地の上に構想されました。しかし台地の西側は古くは海が入っていたような低地で、海面との標高差が少なかったため、運河を掘るには最適でした。そこで台地の裾に、城の移転の前提でもあった熱田湊からの水路を掘り、湊が計画されました。そして周辺にはその水路

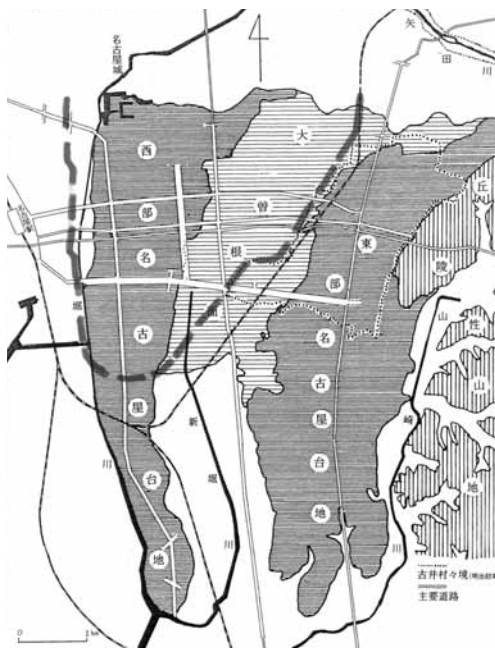


図1 名古屋城下の地形。西側の名古屋台地北部と大曽根面が使われている(「古井村々遷誌」)

や湊を活かす機能が配置されることになりました(図1)。

町の中心軸は、区域を西北から南東に横断していた鎌倉街道を、ルートを変えて南北に引き直し本町通としました。城の正面から熱田の宮にむけて町の骨格線に作り変えられたのです。その道に支障した織田家ゆかりの万松寺は南に移され、中にあった桜の大本と天神だけが残されました。

都市の計画では水の問題が重要です。台地上は戸井が利用できることが、城地の選定段階で調べられていたようで、当初水道はとくに考えられていません。一方排水は、基本的には傾斜を利用して南に自然流下させ、東側はそのまま南に、中心部から西は水路を掘って新しく掘られる運河に流すことにしました。汚水は、当時は黄金水ですから汲み取られて肥料になりました。城下町名古屋は、まずこうしたラフなスケッチが描かれた上で細かな町割が計画されていったと考えられます。

(2)都市の計画

都市にとってまず重要なのは、その立地でしょう。その次に大切だったのが、町をどう具体的な形にしていくかです。これが狭い意味での「都市計画」になります。この都市計画の例には、わが国では古代平城京等の都城の例がありますが、これは国家としての特別なことでしょう。それが一般的になったのは戦国時代の末期以降、城下町が計画的につくられるようになってからです。

この近世城下町の計画では、まず城下の範囲が決められました。住人の身分や税の賦課の問題で「町」と「村」との線引きです。次に、その頃から厳密になってきた「武士」と「町人」の住み分けでした。近世は身分制が守られた社会となりました。従って都市計画も、まず武士の居住地、町人の居住地を決めました。また大きな寺院や神社は周辺部に配するなど、今日というゾーニング(用途地域計画)をしました。名古屋城が造られた頃は、この計画はさらに細分化しており、武士は上級から中級、下級、中間等へと区分されています。

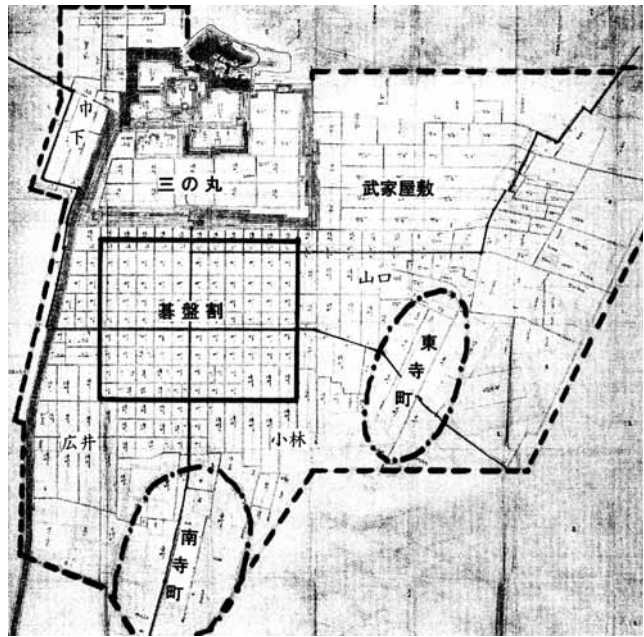


図2 城下の大まかな配置。文献③に加筆した

(3)城下の構想

それでは名古屋城下はどのように構想されたのでしょうか。その計画の過程についての資料はありませんが、いろいろな文献や最も古いとされる1647年(正保4年)の城下町の図面を見ると、当初の計画は概ね次のように行われたことが分かります(図2)。

①武士の街

重臣は城の三の丸の中に配置されましたが、ほとんどの武士は堀の外に分散して配されました。中級クラスは城の東の台地が伸びた辺りに集中し、それ以下クラスは、町の周辺部の山口、小林、広井、幅下と東から西に町の中心部を取り巻くように配置されました。

②町人の街

城の南、城下の1等地は基盤割に町割され、町人の居住地とされました。そして、現住者はもちろん、清須、駿河、京などから移住する商人・職人に与えられました。また一部は、西側に掘削される運河の周辺や、街道の両側にも分散しています。

③寺社の街

寺院は城下周辺部の一定区域に、宗派ごとにまとめて配置されました。場所は街道筋になった本町通の南(南寺町)と岡崎への新道沿い(東寺町)です。また神社は個別に、たとえば城地にあった若宮は南寺町に、清須から移

転の朝日宮は碁盤割南端に置かれました。

以上のように、名古屋城下の計画は城を中心
に放射状に扇型を描く、思い通りの町を計
画することが出来たといえそうです。

3 紀行 本町通

… 町の骨格をつくった通り …

名古屋の城下町の骨格は、鎌倉街道のル
ートを変えて、城から南に熱田に向けて通りを
通し、本町通としました。今回は、城下町探
訪の初回として、この本町通を訪ねてみたい
と思います。

〈札の辻から〉

地下鉄の丸の内駅を降り、一番東の5番出
口を出ます。東に進むと右側のビルの谷間に
桜天神社があります。ここが旧城下にあった
万松寺の中の天神です。今は小さくなりました
が、江戸時代はもっと大きく、城下に時を
知らせる鐘楼がありました。

桜通を進むと次の角が本町通になります。
右に曲ると一本目の角が札の辻跡です。伝馬
筋と交差する城下町の中心で、高札場あり
ました。いくつかの街道の起点になっており、
美濃路名古屋宿の中心でもありました。今は



ビルに囲まれた桜天神社。
左に小さな鐘樓のミニチュアが



札の辻。足元の案内板がなければそれとは分らない角



広小路から本町通を振り返る。ビルの谷間の道に



通りがへこんで、紫川の跡が分る

西北角の歩道にその跡を示す案内板が置かれ
ています。両側には有力な商店が並んでいた
本町通を進むと広小路です。この通りは後に
拡幅されたもので、当初は碁盤割地区の南端
になり、南側に大ドブと呼ばれた排水路があ
る寂しいところでした。

広小路を渡り、少し行くと道が下ってから
上っています。この低い地は紫川と呼ばれた
川のあった所で、台地の雨水が集まって西側
に流れていた跡です。この辺りから南寺町が
始まりました。

〈大木戸へ〉

南に進むと百米道路です。手前を左折した
所に若宮八幡社があります。元は城地にあっ
た天王社と若宮社、罫を引いて天王社は残存
(那古野神社)し城の鎮守に、この若宮社は移
転して名古屋の鎮守とされました。百米道路
の辺りにも大きな寺がありましたが戦災復興
事業に伴って移転しています。

広い道路を渡ると大須です。南寺町は今で
は大須観音に代表されますが、移転の時期が
少し遅れ、当初は2万坪の万松寺が代表格で
した。寺町も表通りは町人地とされ、街道の
賑やかさが保てるように工夫されていました。
寺町の大須が演劇や娯楽の拠点に変化したの
は寺町の広い境内が、後に興行に利用される
ようになったからです。大須は戦後一時沈滞
していましたが、今は見事に回復しています。



大須観音はすこし遅れたためか、
通りからすこし西に入っている



栄国寺のクリスチャン墓地。

昔はビルに囲まれて暗かったが、今は明るくなった

大須を過ぎると門前町。本町通の両側は仏壇屋が続きます。これは後に東・西の本願寺がこの通り沿いに出来たことによるようです。道は緩やかに右に曲って、橘町に入ります。城下の外れのこの辺りも当初は寂しい所で、その東の千本松原には刑場もありました。少し行った左手奥の栄国寺。ここは二千人に上った切支丹の処刑が行われた所です。そしてこの地を魅力ある所にと動いたのが当時の藩



本町通は広い国道19号に吸収される。
この付近に城下の入口の大木戸があった

主、2代光友でした。彼は刑場を遠くに移すとともに、古歌から「橘町」の名をつけました。

本町通に戻ると道は広い国道に飛び出します。この手前辺りが城下の南限で、大木戸が設けられていたところです。東に歩けば地下鉄の東別院駅があります。

4 名古屋城の惣構え

名古屋城は外周の惣構えが形成されませんでした。もちろん当初は惣構えをつくる構想があったようです。1615年8月、家康が大阪の陣の後に立ち寄った時に、名古屋城の惣構えを指示したという記録があります。範囲は、

東：矢田川 南：古渡 西：枇杷島川
とされます(図3)。

しかし、大阪の陣が終わって豊臣が滅び、偃武の宣言をした後の家康が、本気で巨大な惣構えを支持したとは考えられません。戦勝の後、家臣が一生懸命要望するので、大きな構想を言ってお茶を濁したような所が感じられるのです。もっとも江戸城は当時惣構えを構築中でした。しかしまったく何も無い所に、新たに江戸城より巨大な惣構えを造ることは考えられません。そのためでしょう。この構想は一国一城令のスタートとともに消えていきました。もう戦争のための城は要らない。周囲には未だそのことが理解出来なかったように思われます。

〈主な参考文献〉

- ①同編集委員会「新修名古屋市史3」
(1999、名古屋市)
- ②服部錠太郎「名古屋城年誌」
(1967、名古屋城振興協会)
- ③「正保四年 名古屋城絵図」
(1647、徳川美術館蔵)

図3
名古屋の惣構の構想は江戸城より巨大で、それだけに本気ではなかったように思われる

